

ペンテコステ礼拝説教「あなたを満たす聖霊が…」予稿
日本基督教団石神井教会 2017年6月4日

【旧約聖書日課】ヨエル書 2章23節～3章2節

- 2²³ シオンの子らよ。あなたたちの神なる主によって喜び躍れ。
主はあなたたちを救うために、秋の雨を与えて豊かに降らせてくださる。
元のように、秋の雨と春の雨をお与えになる。
- 24 麦打ち場は穀物に満ち、搾り場は新しい酒と油に溢れる。
- 25 わたしがお前たちに送った大軍、すなわち、かみ食らういなご
移住するいなご、若いいなご、食い荒らすいなごの
食い荒らした幾年もの損害をわたしは償う。
- 26 お前たちは豊かに食べて飽き足り、
驚くべきことを、お前たちのために成し遂げられた主、
お前たちの神なる主の御名を、ほめたたえるであろう。
わたしの民は、とこしえに恥を受けることはない。
- 27 イスラエルのうちにわたしがいることを、お前たちは知るようになる。
わたしはお前たちの神なる主、ほかに神はいない。
わたしの民は、とこしえに恥を受けることはない。
- 3¹ その後、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。
あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る。
- 2 その日、わたしは、奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ。

【使徒書日課】使徒言行録 2章1～11節

¹五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、²突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。³そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。⁴すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

⁵さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、⁶この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつけにとられてしまった。⁷人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。⁸どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。⁹わたしたちの中には、バルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、¹⁰フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、¹¹ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」¹²人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。¹³しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

ペンテコステに「教会」を祝う

ペンテコステの祝いのおときを迎えました。昨年のペンテコステに呼びかけさせていただいたことを憶えてくださった皆さんが、今年は、早くから今日の祝いのために備えてくださっていたようです。

主イエスのご復活を祝ったイースターから 50 日目のペンテコステは、キリスト教会の三大祭の一つです。けれども、三大祭と並べて呼ばれる中で、ペンテコステだけは少し趣きが違うようです。クリスマスをお祝いするとき、教会は、その前にアドヴェントという備えの期節を過ごします。イースターをお祝いするときも、その前にレントという備えの期節を過ごします。アドヴェントやレントが備えの期節であることを表して、教会では、「紫」色のシンボルカラー（典礼色）を用いてきました。その「紫」色の備えの期節を経て迎えたクリスマスやイースターに用いられるシンボルカラーは、今度は「白」色です。「紫」の期節から「白」の期節へ。ところが、ペンテコステは、そのような「紫」色で示される期節が備えられていません。イースターの「白」色のまま 7 週間を過ぎて、ペンテコステを迎えてしまうのです。そして、迎えたペンテコステに用いるシンボルカラーは、クリスマスやイースターの「白」ではなく、「赤」です。

ペンテコステの「赤」は、「炎のような舌」と描かれる「聖霊」の赤です。わたしたちの教団の教会では、「赤」を用いるのはペンテコステだけというところがほとんどでしょう。あるいは、ペンテコステから始まる「聖霊降臨節」の約半年間、続けて「赤」を用いている教会はあるかもしれません。その場合は、ずっとペンテコステが続いていると考えているのです。けれども、教派によっては、ペンテコステではない別の機会にも「赤」を用いることがあるようです。ひとつは、主イエスの十字架に架けられたことをおぼえる「受難日」です。主の十字架の「血」を表すものとして、「赤」が用いられるのです。もうひとつは、教会の創立記念の礼拝で用いられる場合です。

ご存じのように、ペンテコステの祝いは、「教会の誕生」をお祝いするときです。二千年前の最初のペンテコステの日、弟子たちおよそ 120 人ほどが祈り集まっていたところに聖霊が降り、そのときから、弟子たちの集団は、出て行って宣教し、新しい人々を仲間に加えるという「教会」の営みを始めたのです。すべての「教会」は、そのペンテコステに誕生した「教会」から始まりました。逆に言うならば、どこかに新しい「教会」の営みが始まるとするならば、そこでは、新しいペンテコステの出来事が起こっている、と言ってもよいのです。

わたしたちの教会と同じ親教会から生み出された教会の一つが、今日は、創立記念礼拝を持たれています。39 年前、ペンテコステをもって教会の創立としたのです。毎年日付が大きく変わっても、ペンテコステに創立記念礼拝をささげて来られました。聖書の物語るペンテコステの出来事の中に、自分たちの教会のルーツを憶える。それは、この日を創立記念日と定めていないとしても、すべての教会にとって、大切なことに違いありません。わたしたちの教会もまた、ペンテコステの出来事の中に、立ち返るべき原点を与えられているのです。

風が吹きつけて

クリスマスに主イエスの誕生の物語を聞き、イースターに主イエスのご復活の物語を聞くように、ペンテコステには必ず聖霊降臨の物語に耳を傾けます。繰り返し聞き直します。飽き飽きするほど、聞き直すのです。それが、「祭り」として祝うことだからです。「祭り」として祝うほど大切なこと、大切に心に留めること、大切に次の世代に受け継いでいくこと。「祭り」なのですから、本当ならば子どもたちも一緒に祝えればよいと思います。旧約のイスラエルの民、現代に続くユダヤ人は、「祭り」を共に祝うことを通して、信仰を次の世代へと受け継いできたのです。キリスト教会も、その「祭り」の祝い方を受け継いできました。

ペンテコステの日に、なぜ「赤」を身に着けて集まり、礼拝堂を「赤」く染めるのか。なぜ、「鳩」の姿を描くのか。わたしたちは、言葉で伝えきれないことを、シンボルを用いて伝え、受け継ごうとしています。聖書の物語自体が、比喩的な言葉を象徴的に用いて、語っているからです。教会学校では、そのようなペンテコステのシンボルを子どもたちに伝えようと、今日の分級では、「風」をテーマにした活動を準備していました。ペンテコステの物語の最初に描かれる「**激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ**」という様子を心に留めよう、ということですが、けれども、これはなかなか難しいテーマのようです。

二千年前の最初のペンテコステに居合わせた弟子たちは、そのとき、いったい、どのような経験をしたのでしょうか。ペンテコステの聖霊の風が、吹いてきたのです。そのとき、120人ほどの弟子たちが、一つになって、どこかの建物の中に集まっていたのです。そこに、**突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえてきた**、ということですが、それは、実際、音だけだったのでしょうか。本当に風が吹いてきたということでもあったのでしょうか。少なくとも、その場にいた弟子たちには、本当に激しい風が吹き入れてきたように思われたのではないのでしょうか。窓を通して、自分たちの家の中にまで吹き込んでくる強い風。家の中の隅々まで駆け回り、**澱んだ空気を一掃してしまうような風**。

ペンテコステの祝いのときに、礼拝堂の窓を全開にしてみたらどうでしょうか。ペンテコステの聖霊の「風」を感じられるのでしょうか。しかし、風は「思いのままに吹く」ものです。窓を全開にしても、風が吹きこんでくる保証はない。そうだとすると、わたしたちは、ペンテコステの祝いの礼拝の中で、その「風」を思い描き、弟子たちの経験したことを思い巡らしたいのです。

礼拝へと招かれ、集められたわたしたちのところに、外から吹き込んでくる風です。激しく吹き込んでくる風です。それは、厄介な、迷惑な風でしょうか。そうかもしれません。外の砂埃を運び込んできて、部屋中を埃まみれにしてしまうかもしれません。そればかりか、あれこれを飛び散らせるかもしれません。大切なものが、うっかりバラバラになってしまったりする。慌てて取り押さえに走らなければならないかもしれません。もう窓を閉めてしまいたくなるような風。それが、ペンテコステの日に吹き荒れた風でした。外から突然吹き込んできて、教会中を吹き巡った風。それが、天から吹き降りてきた「聖霊の風」。

神の御業を語る

二千年前、弟子たちに吹きつけた、あのペンテコステの風は、今も、吹き続けているはずです。それは、旧約の時代から知られていた、天からの風、神の息吹きなのです。吹き止んでしまうはずがありません。わたしたちが、閉ざしていた窓を少しだけでも開けるならば、ペンテコステの風は、その隙間からでも吹き込んでくるはずです。わたしたちが大きく窓を開けるならば、その風は、激しくわたしたちの中の隅々まで吹き巡り、澱んでいた空気をすべて、入れ替えてしまうに違いありません。長年、埃がたまってきたまま手つかずになっていたところにまで、ペンテコステの風は、吹き込んでくるのです。

先週の主日礼拝で、主イエスが天に昇られたときに弟子たちを祝福してくださいました出来事を聞きましたが、その折に、わたしは、「礼拝の終わりの祝祷のときに、目を開けて、祝福を告げる牧師の姿を見ていただきたい」と申しました。多くの方が、祝祷の間、目を開けて祝福を受けとめてくださっていました。そのとき、目を開けてくださった皆さんは、祝福を告げる牧師の姿だけでなく、周りにいて共に祝福を分かち合っているお互いの姿をも、ご覧になられたのではないのでしょうか。共に祝福を受けとめている仲間の姿です。

ペンテコステを迎えた今日、皆さんは、ご自分の窓を開けてペンテコステの風をお受けになり、天からの聖霊を内にお迎えになられるでしょう。そのとき、皆さんは、そこに、お互いの姿をご覧になられ、その一人ひとりが、同じようにペンテコステの風を受け、天からの聖霊を迎えた者の姿であることを、お確かめいただけるはずです。

二千年前のペンテコステのとき、ペンテコステの風を受け入れた弟子たちは、お互いの上に、天から降ってきた「**炎のような舌**」がとどまっているのを目撃したのです。それは、何か得体の知れない物体が頭の上に乗っかっていた、というようなことではなかったでしょう。それは、天からの聖霊を迎え入れた者の見せた、新しい姿を言い表そうとした言葉だったはずです。皆の上に、神の霊がとどまっている姿です。一人ひとりのもとに神が霊となっておいでくださって、一人ひとりが、聖霊に満たされる器となっている姿です。

それは、わたしたちのことです。お互いの一人ひとりのことです。しかし、それは、わたしたちが目を上げなければ、見えないことです。神の御前で、目を開き、心を開いて、神の霊をお迎えしようというときに、自分自身のことよりも先に、まずわたしたちの目に入り、心に留めるべき一人ひとりが、いるのです。

その一人ひとりに、神が御業をもって新しいことをお始めくださっていることを、わたしたちは、互いの内に見、目撃し、語るができます。神の御業を語るができます。主イエスに導かれて、わたしたちは、ここにたどり着いたのです。わたしたちの「舌」は、もう、己のことを語る舌ではありません。神の御業を語る舌です。神の御業のなされている周囲の人々のことを語る舌です。

神が、今、ここに共にいて、この貧しい器一つひとつを用いて、御業をなしてください。わたしたちは、そのことを、語らないではいられないのです。